

## 61 Princes Gate と 19 Pelham Place

— 下田歌子 ロンドン借住居 —

大 関 啓 子

1893 年（明治 26 年）9 月 10 日、下田歌子は欧州に向けて横浜港を発つ。二人の内親王の皇女教育の内命を受け、海外の教育状況を視察するためであったが、官費を支給されていた。下田にとっては初めての海外への旅であり、船で 40 日余りかけてマルセイユ港からパリ経由で、目的地の英国に到着する。ブライトンで 1 ヶ月余り英語学校で学び、下田がロンドンに入ったのは 12 月上旬であった<sup>1</sup>。そこから帰国のため 1895 年（明治 28 年）6 月にロンドンを発つまでの、1 年 8 ヶ月間のロンドンでの生活は、エリザベス・アンナ・ゴードン夫人（Elizabeth Anna Gordon）宅（61 Princes Gate）に寄宿していたと、長い間考えられてきた。しかし、チェルトナム・レディーズ・コレッジ（Cheltenham Ladies College）に保存されていた下田の直筆英文書簡 5 通を 1991 年に発見した事により、下田が別の下宿（19 Pelham Place）へ転居していた事が判明した<sup>2</sup>。この二軒の下宿について、ロンドンに残された手掛りを辿り、下田の移転の理由とその状況を探ってみたい。

### I

第一に、下田はいつ転居したのか。前述の下田の英文書簡 5 通の日付は、いずれも 1895 年 2 月以降であるが、それ以前にも下田は日本への和文書簡にこの住所を記している事から、1894 年の可能性が高い。下田の海外視察の当初の予定は一年間であったが、途中半年毎に二度期間を延長して、通算二年間となったのである。この期間延長も、転居の節目となった可能性がある。

しかしそれだけでは、第二のなぜ転居したかの根拠に十分なものとはいえない。ゴードン夫人は、下田が渡英して以来、自宅に寄宿させて便宜を図り、英国社交界や様々な視察等への紹介者となり、さらに下田のヴィクトリア女王謁見に尽力した人物である。それ以前に夫と来日経験もある親日家で、日本語もわずかに話す事ができ、姉妹のように親身に接してくれる「頼もしきもの<sup>3</sup>」として、海外生活が初めての下田にとっては、またとない家主であったはずである。ゴードン夫人宅の 61 Princes Gate の住宅環境は、ヴィクトリア&アルバート博物館（Victoria & Albert Museum）の隣に

位置し<sup>4</sup>、周辺には他の博物館や学校も多くあり、ハイドパークの南側にある堂々たる建物の続く街並である。さらに下田の滞在した頃の記録を調べると、ノーベル文学賞受賞の若き日のバートランド・ラッセル (Bertrand Russell)、同じく『フォーサイト・サガ』(*The Forsyte Saga*) の作者ジョン・ゴールズワージー (John Galsworthy)、そして名優ローレンス・アービング (Laurence Irving) や、『ゴールデン・トレジャリー』(*The Golden Treasury*) で有名な詩人フランシス・パルグレイヴ (Frances Palgrave) など、多くの文化人や芸術家達が、その周辺に住んでいた閑静な高級住宅街であった。英国人は、住所によって相手の身分を判断するとよくいわれるが、この 61 Princes Gate という住所は、ゴードン夫人の温かい庇護とともに、当時の社交界で、下田には大いに役立ったに違いない。

ゴードン夫人宅の建物は、1936-7 年に続きの棟とともに取り壊され、現在では鉄筋 10 階建て 33 軒分から成る 2 棟のマンションに建て替えられた。それらは分譲され、日本の企業なども所有者に名を連ねる高級マンションになっている (写真①)。そのため当時の建物は、その左右両脇に残る地下 1 階、地上 5 階建の建物 (写真②) から想像するしかない。それらは、玄関の両脇に円柱を配したヴィクトリア朝の壮麗なもので、英国上流階級の住居にふさわしいものであった。現在ではその並びは、ヴィクトリア&アルバート博物館の一部となり、その他の部分は、通りをはさんですぐ前にあるロンドン・インペリアル・コレッジや各国大使館などの事務所として使用されている。

それに対し、転居先の 19 Pelham Place は、現在でも下田の住んだ当時の建物がそのまま残っており、下田が生活した環境を直接見る事ができる。ゴードン夫人宅ほど壮麗な建築物ではないが、地下 1 階、地上 4 階建のアーチ形を成す瀟洒なテラスハウス (写真③④) である。現在の所有者もすべて各住居ごとに分譲されたものである。所在地は、ハイドパークとテムズ川の間位置し、ヴィクトリア&アルバート博物館から徒歩約 5 分、つまりゴードン夫人宅へも 10 分程で歩いて行ける距離であり、しかも一段と閑静な住宅街で、すぐ横に住人専用のアーチ形の庭園もある極めて恵まれた住宅環境になっている。

## II

下田が転居した当時のこの建物の所有者と住人について、英国の当時の国勢調査 (Census) の記録を調べた。そこには、家主としてスザンナ・エドワーズ (Susannah Edwards, 以後エドワーズ夫人と略す) という一人の女性が、浮かび上がってきた。彼女は、下田が同居した 1894 年には 73 歳、それ以前から下宿業を長年営んでいた。この頃の同居人は、母と同名の長女スザンナ・メイダリン・エドワーズ (Susannah Maydalen Edwards, 以後スザンナと略す) 48 歳と、住込の若い女性の使用人 1 名と思われる<sup>5</sup>。この家族構成は、1891 年の記録からのものである。その 10 年後の 1901 年の記録には、エドワーズ夫人の息子の嫁スザンナ・フロレンス・エドワーズ (Susannah Florence Edwards) 44 歳と、孫娘のフロレンス・マジョリー・エドワーズ (Florence Marjory Edwards) 11 歳、そして孫息子のロバート・エイモス・エドワーズ (Robert Amos Edwards) 3 歳と、使用人 2 名が同居している。しかし孫 2 人の出生地は中国となっていることから、下田の住んだ 1894 年には、この前者 2 人は中国に在り、後者のエイモスはまだ生まれていなかったため、前述の 3 名のみが下田と同じ家で生活していたものと判断できる。

エドワーズ夫人の家族の記録から、彼女の夫はサミュエル・エドワーズ (Samuel Edwards) であり、夫人よりも4歳年上、ウェールズのブレックノック州 (Brecknockshire) 出身で、大工職人を家業とした一家の家長であったが、1881年から1891年の間に死亡している事が判明した。夫の大工は雇われ業であり、それを手伝う傍ら、エドワーズ夫人は早くから下宿業を営み、家計を支えた。1851年彼女が30歳の時には、すでに58歳と70歳の2人の女性の下宿人を置いている。しかし住所は、Pelham Placeではあるが19番地ではなく、通りの反対側に位置する28番地に住んでいた。その後1861年には、一家はさらに次の6番地に転居していて、より広い家へと昇格させていくのである。

1871年にはすでに最終的な19番地に移り住み、それらのいずれの時も、常に2名の女性の下宿人を置き、住込の使用人を雇っていることから、エドワーズ夫人の下宿業は、評判もよく、常に順調に営まれ、家計を潤していた事がわかる。下田がこの下宿を選んだ理由も、おそらくエドワーズ夫人の評判の良さを紹介されたものであろう。その時、下田の他に、別の下宿人がいたかどうかは定かでない。しかも、エドワーズ夫人はこの10年程前には夫を亡くし、未亡人となっている。子供達も、長女のスザンナ以外は独立して別居し、この一家が最も寂しい状況にある時に、下田は部屋を借り、同居した事になる。

1851年から1901年の6回の国勢調査の記録で見える限り、エドワーズ夫人はサセックス生れで、五男一女の子沢山であった。1850年、23歳の時に長男イライジャ (Elizah または Elijah John Edwards) を初産し、その2年後長女のスザンナが生まれ、さらに4年後次男のサミュエル (Samuel A. Edwards) が誕生するが、10年後の記録からサミュエルの名前が消えているため、入寮などの別居ではなく死亡したものと思われる。また、その3歳下に三男のトマス (Thomas L. Edwards)、2歳下に四男エヴァン (Eben または Evan Henry Edwards)、3歳下に五男アラン (Allan または Allen Joseph Edwards) と続く。この後1861年には、6番地に転居している。この家庭がもっとも賑わったのは、1871年エドワーズ夫人50歳で19番地に引っ越して来た時であり、長女のスザンナが戻り、サミュエル以外の子供達がすべて未婚で同居していたので、おそらく手狭になったために、より広い19番地に引っ越して落ち着いたのであろう。夫のサミュエルは、仕事を独自にとって自営していた親方ではなく、雇われ大工であった。そのため収入は限られたものであり、妻と五男一女の家族を養うには、十分な収入とはいえなかったであろう。エドワーズ夫人が、子育てに忙しい中、常に下宿人を置いていたのは、そうした家計を支える必要があったためと思われる。1881年にはイライジャとトマスが別居した後に、姪のアダ (Ada Mary Baldwin) 10歳が同居している。

西洋婦人は今<sup>や</sup>已むを得ず外に出て働いて、餘儀なく虚勢を張って居るやうな姿であると申す人がありますが、全くそんな傾きがないでもありませぬ。中流及び其<sup>それ</sup>以上の階級までも、家庭では却々男子獨りの収入を俟<sup>ま</sup>つ譯にもいきませぬ又器械の發明進歩が著しくなつて、一般の設置の行き届いた社會では、家事には手をかくる點も尠<sup>てん すくの</sup>うございますので、外出も出来易いといふ有様で御座います。

およそ西洋に於ける程、貧富の差別の甚だしきはございますまい<sup>6</sup>。

下田が書いているように、夫の働きでは生活できず、共働きして副収入を得ようとするれば、子沢山の夫人としては、下宿業が一番効率のよい仕事ともいえる。こうした状況から判断すると、エドワーズ夫人については、大工サミュエルの女将さんとして、五男一女の母親として、生活力旺盛な肝っ玉母さんといった女性像が浮かび上がる。下田にとっては、家賃を払う事により、ゴードン夫人宅よりも気兼ねなく過ごせる居心地のよい下宿であったろう。

### Ⅲ

下田は、渡英後間もない頃の下宿での生活を、次のように書いている。

初めて西洋へまゐりまして困りましたことは、西洋に比べては時間の優<sup>せいよう</sup>長<sup>あちら</sup>な物事の不規律な日本の生活になれてをりますので、西洋のきまりのよい、規則正しい、そして時間から時間までとせきたてられる生活には、眼がまはるやうでございました。朝晩の支度ができますと鈴が鳴ります。食堂が開くとまた鈴が鳴ります。それから十分もおくれますと、必ず誰か部屋へ来て、『あなた、御病氣ではございませんか。』と尋ねます。今朝は疲れたから少し寝坊をしようと思ひましても、思ふやうにできません。しかし、これも慣れると却って氣持がよくなりました<sup>7</sup>。

これはおそらく、最初の下宿したゴードン夫人宅での事と思われる。ゴードン夫人は、マンチェスターのブルジョワジーの出身で、スコットランド貴族の夫との間に二男三女の子をもつ母親で、裕福な家庭を営んでいた。夫人自身も、オックスフォード大学の言語学者フリードリッヒ・マックス・ミュラー（Friedrich Max Müller）に師事し、日本や仏教に関心を抱き、比較宗教学の研究をしていた。親日家で親身に世話をする夫人に感謝する一方で、下田はこうした上流階級の規則づくめの暮しには、日本での生活とは異なった窮屈さを感じたに違いない。

下田は、ゴードン夫人の家庭について次のように書いている。

又余が倫敦に到り着きぬる始めより、無二の親友として、恰<sup>あた</sup>かも同胞姉妹の如き、最と深切なる助けを受けし一夫人ありけり。此人の生家は、或る富豪なる貴族にして、其夫はまた英京屈指の金満家、當時下院の議員なりき。

東洋人の目もて見る時は、此夫人ぞ、誠に深く敬愛すべき、婦徳を備へたるとは感ぜられき。勿論英國にても、淑徳、慈善家の譽れ高く、又女子教育の事にも、中々の熱心にて、自著の出版物等も、世に行はれつゝありき。此家は、倫敦にても、目貫の場所に在り。家屋の建築室内の装飾等も、十分に行き届きて、之を前の女博士が家に比すれば、彼れは中等の中の階級、是れは先づ中等の上の部類或ひは、上等の下許<sup>ばかり かず</sup>に數まへられぬべき家格なりかし<sup>8</sup>。

また下田は、夫人がこの14年程後に二度目の来日をした時、彼女の紹介文を次のように書いている。

夫人は英國蘇格蘭の御産れで幼少の時から餘程學問に秀でられ、特に道德とか宗教とか云ふ方の學問には、餘程御研究が深く届きました。現に先年死なれました處のマクスミュラーと申す哲學の大家とは、餘程御懇親の間柄で御座います。其外何くれと學問にも技藝にも優れたお方で御座りまして、夫れで居て誠によく家庭を整理なされ、大勢の御子様方から、家中の一切の事を少しの手落もない様に整理されますのには、廣い英國にも澤山はあるまいと申される程で御座います。

今から十何年前のお話で御座いますが一度日本においてになりまして、餘程日本の山川草木や、日本人の氣質風俗などがお氣に入ったと見えて、夫からは、英國でも有名な日本好きなお方で御座いまして、英國に居る日本の留學生や、其の他の人々で此のお方の御世話になった者は澤山御座います。現に私なども其一人で、夫れはもう云い盡されぬ程の御厄介になったので御座います。「英國に於ける日本の母」と誰いふとなしに此お方を呼ぶ様になりました。(中略) 私は絶えて久しき母に逢った様な氣が致しますので御座います<sup>9</sup>。

下田を親身に世話していたゴードン夫人の誠意と、整理の行き届いた家庭の様子が、ここから窺える。下田が同居した当時、ゴードン夫人は41歳であった。夫のジョン(John Edward Gordon)は42歳、当時は株式仲介人(stockbroker)で、裕福に暮していたらしく、9名の使用人を住み込ませていた。下田のいう通り、ゴードン家は英國では、中流の上あるいは、上流の下に属する階級といえる。二人には、12歳の長女キャサリン(Catherine M. Gordon)、8歳の長男ロナルド(Ronald H. Gordon)、6歳の次男エリエル(Eriel Gordon)、そして5歳の次女アルマ(Alma Gordon)、3歳の三女ヴァイオレット(Violet Gordon)の5人の子供がいて、賑やかに暮していた。61 Princes Gateには、同じロンドンのケンジントン宮殿の東側にある7 Vicarage Gateから、その数年前に引っ越してきたばかりであった。夫のジョンは、スコットランドの判事で保守党下院議員を父にもつ、名門の男爵家の長男に生まれ、下田が日本に帰国する1895年から1906年まで、保守党議員を務めている。若い時にエジンバラ大学とエジンバラ・アカデミーで学び、夫人の研究活動にも理解のある夫であったろう。夫に対する夫人の態度についても、下田は次のように観察し、書いている。

此夫人が夫に事<sup>つか</sup>ふる有様は實<sup>げ</sup>にわが東洋夫人に髣髴として、寒<sup>あした</sup>き朝涼<sup>ゆうべ</sup>しき夕、其衣服を選定増減する事等より、食物の嗜好一切の事まで、注意に至る所無く、毫も其良人をして、不満の心を起さしめし事ありしを見ず。また夫が朋友と對話する時など、英國の禮法として、男子の客も、先づ婦人の意を迎へ、其詞<sup>そのことば</sup>に従ふが常なれども、夫人は夫が自説を吐く時には、謹聴して、敢<sup>ことば</sup>へて詞<sup>その</sup>を交へず、其己れが語る事も、夫聞きて以て、不可なりと云へば、げに然もこそと自ら耻<sup>はじ</sup>らひたるさまして、口をつぐみぬ。その形狀誠に年若き、女子が、夫に對するさまにも似たり。此の種の人は實<sup>げ</sup>に、女權の強き、英國などに於ては、殆ど、多く見ざる所なりき。夫人は、既に五十に近き程の齡なりけれども、容顏清く麗は<sup>かおかたち</sup>

しく、妙齡の昔忍ばるゝ人品、いと氣高く奥床しく、立居ふるまひ、いかにも優美閑雅に  
して、天晴貴婦人の標本たるに耻ぢざる人なりとぞ覺えし<sup>10</sup>。

下田が帰国した後、ゴードン夫人は1907年に二度目の来日をし、第一次世界大戦で長男のロナルドの戦死の報が入るまで、およそ10年間日本に滞在し、下田と旧交を温め、日本の仏教とキリスト教の比較宗教学の研究を続ける。この間、夫のジョンは、1906年まで下院議員を務めた後、英国南部の保養地ホーヴ（Hove）に引退し、さらに1911年から14年まで、ブライトンの議会で議員活動を行っている。この間、日本にいた夫人とは別居状態で、三人の娘達と長女の子供2人とホーヴで暮っていた。しかし最後は、1915年2月15日にサセックスの養護老人ホームで、64歳で亡くなり、£73,408の莫大な遺産を遺した事が記録されている。

下田が同居した時期は、ゴードン家にとっては5人の子供達を夫人が育てるのに忙しく、夫も下院議員になる直前の人生で最も良い時期にあった。こうした状況で下田は、家庭内での英国人の実態を鋭く観察している。

東洋では父母に冠詞を付けて嚴父慈母と云ひますが、泰西の家庭では嚴母慈父と云はねばならぬ。父の方が可愛がって、母の方が厳しく躰ける。是等も自然に母親は子女を預かる責任がありますから、母親に重きをおいて居る。と云ふのは社会が母親に子供を預けても十分安心だと云ふ迄に女子が進んだ結果である<sup>11</sup>。

ここでは厳しい母親としてのゴードン夫人と、慈父としてのゴードン氏の姿が思い浮かぶようである。

且夫人熱心なる慈善家なるを以て、度々貧民院、孤兒院、病院など、種々の處に到りて、物品を與へ、金圓を恵み、夜は有益なる宗教、又は各種の學會に至ることも、屢々なりき。夫人は、當時年齢四十七八にして、十五六の女兒を頭に、男女五人の子を持てり。其内、三歳計りなる末女には、保姆をつけ、今一人の侍婢には、他四人の子女が世話を爲させぬ。佛語と洋琴とは、別に、教師を傭ひて、自宅稽古をせしめ、自分にも、時々、其復習等を試みられき。（勿論、夫人は、佛獨の語も達者に話し、洋琴も随分上手なりとの事なりき。）又日曜日には、朝は大抵夫婦、親子打ち連れて、寺院に詣で、それより、博物館、動植物園等に伴ひて、子供の爲に、智識を啓發するの助けとなし、且新鮮なる空氣を呼吸せしめて彼等が健康を保持することを、勉むること切なり<sup>12</sup>。

自らの学会や慈善活動で忙しい中、5人の子供達の教育に熱心なゴードン夫人の、母親としての姿勢に注目し、詳細に観察している。しかし下田の書いているゴードン夫人（41歳）と長女（12歳）の年齢は、実際の年齢とは、3-7歳の誤差がある。これは親しき仲にも礼儀ありで、下田は、直接夫人や家族に、年齢を尋ねた事はなかったのであろう。

私が長く懇意にいたし、<sup>もともと</sup>最長く居りました所の夫人などは、大層學者で、社会でも評判のよい婦人でありましたから、家庭も最もよくありましたが、<sup>この</sup>此両方の觀念を養ふことに付いて、餘程母親は骨を折りますよ。貯蓄心といふものを養うて、濫りに物を使ひ捨てないといふことを一方に教へながら、一方に於いては人に物をやるといふことを、非常に能く教へます。それでお前のお金が是だけ使ふと減るよといふことを、一方に教へて居って、一方には人を恵む<sup>13</sup>。

ここでは、家庭における理財の觀念と慈善を、子供達にバランスよく教えている事に、感心している。また母親としての厳しさにも触れている。

夫人は、其子女を鍾愛<sup>その</sup>すること、甚だ深かると、<sup>しょうあい</sup>もに、之を教ふこと、<sup>また</sup>亦極めて<sup>いつく</sup>厳しく、子女の其母を愛し慕ふことも、格別なると同時に、之を恐れ憚<sup>はばか</sup>ることも、<sup>また</sup>亦非常なりき。概して云へば、彼等は、其善き事<sup>その</sup>を為しけりと、自ら信ずる時には、一分時間<sup>な</sup>でも速く、母に見えて之を見し、之を語らんと勇みたち又、其母の足音を聞きてさへも、身を縮めて<sup>おそ</sup>おそれ<sup>うれ</sup>愁ふるをこよ無かりき<sup>14</sup>。

上は12歳から下は3歳までの二男三女の子育て中のゴードン夫人宅で、下田は小さな子供の躰についてしっかりと観察し、母親の心得や子供の躰に必要なものを見極めていく。

満二歳以下の間に、正しい心を養って置かぬければならぬ。<sup>その</sup>其時自分には身の寒くなるやうですけれ共、他日小供の幸福を得るには、非常な勇氣を出して母親がしなければなりませぬ。その時に老人でも居やうものならば困る、そんな残酷なことまでしなくても宜いだろうと言って、止められて困りますが、とにかく非常な時には非常な躰けをするので、十分脳の発達しない中に躰けて仕舞って置くと、何だか知らぬが、一種正義を喜ぶ、正義に進むといふ心を小供の上に宿します<sup>15</sup>。

また、家庭内での女性の生活について、住居の修繕は、女性の仕事であると述べている。

家に薄きと申したが、西洋婦人には寧ろ決して<sup>かよう</sup>斯様な事は御座いませぬ。これはよくこの種に関する教育を受けて、其の理屈を知って居るのと、経済思想が発達して居るからであります。然るに毎日丁寧に家屋を掃除する人、家屋に対する情の厚い日本婦人に之を為すもの、少ないのは、<sup>はなは</sup>甚だ不思議矛盾した事と思はれますが、之は未だ修繕が婦人の責任に属することをよく考へないからであるのであらうと思はれます。小修繕は任じて婦人のなすべき務めであります<sup>16</sup>。

家庭内をよく整理していたゴードン夫人も、おそらく英国人の一般家庭と等しく、屋内の小さな修繕などは、使用人に任せずに、自ら行っていたのであらう。こうしてゴードン夫人宅に寄宿する間、

下田は、英国上流階級における家庭内の人間関係や子供の教育等を、鋭く観察し記録している。

#### IV

一方、転居先のエドワーズ夫人の家庭では、子供達のうち、三男のトマスは18歳までに銀行員となり、五男のアランは23歳までに、既に事務勤めをして働いているため、高等教育は受けていない。長男のイライジャ27歳と長女のスザンナ25歳は、1871年の調査時に未婚で、まだ学生と記されており、その10年後の調査時には長男は家を離れている<sup>17</sup>。四男のエヴァンの行方を追ってみると、エジンバラ大学(The University of Edinburgh)を出て外科医になり、Master of Surgeonとなっている事がわかった<sup>18</sup>。この当時、子供達の3人に高等教育を受けさせ、四男を外科医にした家庭には、大工の父親に対して、母親の教養が影響していたのではないか。とすれば、エドワーズ夫人は、実際の身分や彼女の受けた教育以上に、そうした子供達の進路に対する理解力があつた人物と考えられる。

またエヴァンはその後、英国を離れ、The China Inland Missionに加わり、上海へ移り住んでいる。おそらくそこで、前述の嫁のフロレンスと結婚し、2人の子供を授かった。そして何かの事情で、妻と子供2人は先に英国へ帰国し、母親のエドワーズ夫人と同居したものであり、本人のエヴァンの行方は、それ以降は不明である。

このThe China Inland Missionは、1865年に、ジェームズ・ハドソン・テイラー (James Hudson Taylor)によって創設されたプロテスタントのキリスト教宣教組織であつた。テイラーも医師であり、エヴァンは医師同士としての繋がりから知り合い、宣教活動に参加したものと思われる。その根底には、エドワーズ夫人の家庭が、敬虔で真面目な英国国教会徒の家庭であつた可能性が高い。そのためThe China Inland Missionと日本の宣教師または学校関係者への関わりが、下田の転居先紹介に何らかの影響を及ぼしたとも考えられるが、英国内での関係の方が有力である。

このようにエドワーズ夫人について見る限り、サセックスの出身で、決して貴族的な雰囲気はなく、むしろ五男一女の肝っ玉母さんといった庶民性を感じる人物である。それでいて子供達の高等教育にも理解を示す女性であつた。下田の住んだこの当時、彼女は未亡人となり、息子達も皆家を離れ、高等教育を受けた独身の長女と二人で、女性の使用人1名を使い、ひっそりと暮している時期であつた。四男とその家族は、日清戦争の最中に遠く中国(清)に住み、おそらく彼女の心配の種であつたろう。73歳のエドワーズ夫人にとって、息子のいる遠いアジアからやってきた女性、下田の存在には、特別な思いを抱いたであらう。

またこの転居は、おそらく家賃と借家生活に伴う諸費用の節約にも役立ったはずである。下田はこの後ヴィクトリア女王謁見の折に、袴袴を着用した理由の一つとして、洋服の礼装は裾を引いて費用がかかる事を挙げている<sup>19</sup>。官費が支給され準備した滞欧生活ではあつたが、一年の予定を二年にまで延長し、追加の留学費を下賜されたものの、生活を節約する必要があつたのである。下田はそれを、1895年1月11日付の佐々木高行伯爵宛の書簡にも記している。

また英国人の日常の節約と慈善への熱意については、次のように述べて感心している。



私ども日本人が初めて欧羅巴へ参りまして、第一に感服しますことは、家庭が思ったより<sup>せつけん</sup>節儉で、實にキマリのよいことでございます。まづ家の建て方から申しまして、地面を廣く取って空地を澤山に残すといふやうなことはなく、狭い地面の上に家を建て、それを三階にも四階にもいたします。日本の少し大きなお家へあがってみますと、一年の中に幾度もお使ひになりさうもない間を幾つも<sup>こしら</sup>拵へておくやうなものよくございますが、西洋ではそんなことは決してございません。

日用家具なども、ホンの日々に必要なものばかりのほかは備へておきません。それに、品物の並べ方や、おき方などにも、少しも無駄がみえません。古靴下一つなくなると大騒ぎ。かやうに、何事も實用的實利的で、餘裕といふものがありませんから、初めて日本から行った私どもは、眼がまはるやうで、せせこましくて、イヤになってしまひました。私のをりましたある英國人の家庭ではある朝、娘が古靴下を片一方なくしたといふので、家中ひっくり返るやうな大騒ぎでございました。また墓所の柵の上にあるパンの一片が<sup>ひときれ</sup>なくなっても、調べられるといふわけで、日本流の鷹揚なところは少しもありません。それでも、いざ慈善事業への寄附となると、随分思ひ切ったお金を出すやうでございます。つまり無駄といふことの少しも無いやうにといふ組織でございます。これなどは、よほど日本人の真似てもよいこととせうと思ひます<sup>20</sup>。

# V

ゴードン夫人宅にも近く、下宿業にもベテランで、教育にも理解をもつ女家主が営むこの下宿を、下田が転居先として選んだもう一つの理由がある。それは、下田の教育視察の方向転換であった。1894年8月1日、ロンドンから下田は、佐々木高行伯爵宛に滞在延長を希望する書簡を出している。その中でこの当時の日清の関係について、次のように書いている。

かくのごとき硝煙砲声の間に兄弟の国たる日清相見ること立至り候事残念千万に候。実に今日親しく欧州列国の大勢を見聞仕り候へば、敵国に刃を貸し、盗人にかてをもたらずの感に堪へ申さず候<sup>21</sup>。

この書簡の日付は、奇しくも日清戦争が宣戦布告された日付であった。ヨーロッパからアジアの動きを見ていた下田は、日清を「兄弟の国」として、戦争の原因となった朝鮮と清国そして日本の三国が東アジアで連携していく重要性を考えていたのである。下田は日清を「兄弟の国」として憂国の気持から欧州列国の脅威を感じ、日本の将来に「何卒此後わが政府の充分強固に、百年の善後策を講ぜられ候事をのみ祈り入候」と書いている<sup>22</sup>。

下田の考えた日本の「百年の善後策」の一つは、日本の教育の根本を改革し、多くの人々に教育の機会を与え、社会に貢献できるようにする事であった。それは、日本の国民教育の一環として、女子教育、しかも華族女学校のような上流だけではなく、中流以下の女子の教育に力を注ぐ事であった。新しい教育の力で女性を育て、社会に改革進歩をもたらそうとしたのである。下田はこの後

1895 年（明治 28 年）に欧州から帰国後、準備を進め、3 年後の 1898 年（明治 31 年）に帝国婦人協会を設立。翌年 5 月にはその最初の教育事業として私立実践女学校と女子工芸学校を創設し、さらに実践女学校附属慈善女学校および女子工芸学校附属下婢養成所を開設している。

この手紙を境にして、下田は、華族女学校学監としての高貴な女性の教育から、一般庶民の女性の教育に目を向け、視察の対象を、皇女教育から中流以下の女性の教育と生活に向けていくのである。このような英国での庶民の女性の教育とその生活を知る上で、下田にとって、エドワーズ夫人宅での下宿生活は、ゴードン夫人宅の上流階級の暮しに比べ、大いに役立ったはずである。おそらくそこで観察したであろう体験の一部を、下田は次のように書いている。

泰西の家屋は<sup>すうそうろうもう</sup>数層樓設くるの構造なる故に、<sup>その</sup>其下層及び、二階の如きは、みな客室、又は、主人主婦等の居室、書齋など、<sup>すうよう</sup>樞要の箇所に宛てらるゝを以て、小児の居室、寢室等は、多くは、<sup>なわ</sup>尚其れより上層の樓に<sup>ろう</sup>設けらるゝを普通とす。さればこの高き樓より<sup>のぼ</sup>下界へ上り下りするさま、やうやう歩み習へる程の小児を軽々と搔き抱きて、走りて昇降せしむるもあり。馴れぬ目より見れば、いかにもあぶなげに覺ゆれども、馴れては外より思ふばかりは、危き事も無きものなるべし。然れども、階段多き住居は、幼少の子女が爲には、困難ならんと察せらるかし<sup>23</sup>。

これは、標準的な英国式テラスハウスの住居の構造について述べたものであるが、エドワーズ夫人宅もこの間取りになっている。下田は自分が実際に泊まって体験したのは、中流までの家庭であると述べている。

<sup>それ</sup>夫から中等以下の家庭になりまして、勿論私の泊ってしらべたのは中等まで、どうも下等の所まで行って寝泊りしませぬから能く分りませぬが、中等以下の家庭では、小供の時から非常に仕込むことは理財の観念です。實利的、即ち一文一理の金で無駄に使はないといふことに付いての教育は又酷いものです<sup>24</sup>。

このように 61 Princes Gate のゴードン夫人宅と、19 Pelham Place のエドワーズ夫人宅での生活体験は、下田にとって、女性・子供・夫婦・親子等について、また家庭教育について、その当時の英国人の上流と中流階級の生活実態を観察する貴重な機会となった。1894 年 8 月 1 日付の佐々木高行伯爵宛の書簡を境に、当初の皇女教育の準備のための一年間の欧州滞在を期間延長し、その目的を中流以下の女子教育へと向けていく過程で、下田は経済的理由だけでなく、庶民の生活を体験するために、エドワーズ夫人宅への転居を決心し、その下宿先を選んだ可能性が高い。19 Pelham Place のエドワーズ夫人宅で庶民の生活を体験し、様々な実態を見聞きして、下田はそれらを鋭く分析している。その成果は、帰国後の多くの著書に見えるだけでなく、日本の一般女性の教育を目指して開かれた、実践女学校と女子工芸学校の教育に活かされる事となったのである。

注

1. 大関 啓子「まよひなき道一下田歌子英国女子教育視察の軌跡」『実践女子大学文学部紀要』第36号（1994）pp. 1-21  
この中（p. 5）でゴードン夫人宅を 19 Pelham Place としているが、これは 61 Princes Gate の誤りであり、ここに訂正する。
2. 大関 啓子“The ‘Hill Difficulty’ —Women’s Higher Education in England”『実践女子大学文学部紀要』第35号（1993）pp. 35-57.
3. 大関, 1994, pp. 6-7.

「頼もしきもの」

知らぬ国の人の心は、なべて頼もしげ無からんと思ひなしたるに、いといと情深う物の思ひやりいみじき女友達見出でたる。見慣るゝまゝに外国人と云ふ事をさへ忘れて、姉妹のごと親しう睦まじう、思ひ成りぬるこそ、なほ最とあはれなるものにはありけれ。なかは、同じ所には生れざりけん。斯う海の外なる住居は、別れと云ふ事の逃れ難きを、いかに為るわざにかなど打ち言ひて、わが所<sup>いたづ</sup>勞きに伏したりし程などは、身も瘦する許り心遣ひして、何くれと親めき看<sup>み</sup>扱はれたりしはや。こは嬉しきものゝ中にもとぞ。

（下田歌子, 1895. 『外の濱づと』『香雪叢書』第1巻（1932）p. 282）

4. 現在では、ヴィクトリア&アルバート博物館がさらに近くまで進出し、ほとんどその一部といつてよい程の関係にある。
5. 英国の国勢調査は10年に一回行われており、1891年の次は1901年となり、下田のロンドン滞在期間の1893-95年についての詳細は資料がない。そこで今回は、その前後の1851年から1901年までの10年毎の6回分<sup>てん</sup>の原簿記録を参考にして、この家族の変遷を調査した。
6. 下田歌子「家事の大要 下」『愛国婦人』第316号（1915）『下田歌子著作集（2）』p. 141.  
以下、下田からの引用文中のルビは、新か<sup>てん</sup>に改め、原文より特に必要なものに限った。
7. 下田歌子「私が洋行中に見たる西洋人の美點<sup>てん</sup>」『婦人世界』第5巻第2号（1910年）  
『下田歌子著作集（7）』p. 10
8. 下田歌子『泰西婦女風俗』（郁文舎, 1899）pp. 13-14
9. 下田歌子「目下來遊中のゴルドン夫人を紹介す」『愛国婦人』第139号（1907）  
『下田歌子著作集（2）』p. 102
10. 『泰西婦女風俗』p. 18
11. 下田歌子「英国の家庭教育（承前）」『をんな』第2巻第8号（1902）  
『下田歌子著作集（1）』p. 94
12. 『泰西婦女風俗』p. 15
13. 下田歌子「英国の家庭教育」『愛国婦人』第8号（1902）『下田歌子著作集（2）』p. 17
14. 『泰西婦女風俗』p. 19
15. 下田歌子「英国の家庭教育（其六）」『愛国婦人』第10号（1902）『下田歌子著作集（2）』p. 26

16. 下田歌子「住居に就いて 上」『愛国婦人』第337号（1916）『下田歌子著作集（2）』p. 182
17. 1861-1901年のEngland Censusに拠る。
18. *The General Medical Registry*に拠る。
19. 下田歌子自筆草稿「英国ヴィクトリア女皇謁見の印象」（1933）大塚宏昌翻刻に拠る。
20. 下田歌子「私が洋行中に見たる西洋人の美點」『婦人世界』第5巻第2号（1910）  
『下田歌子著作集（7）』pp. 7-8
21. 下田歌子書簡 佐々木高行伯爵宛、明治27年（1894）8月1日付。  
津田茂麿『明治聖上と臣高行』（自笑会、1928）p. 876
22. 下田歌子書簡 佐々木高行伯爵宛、明治27年（1894）9月19日付。津田茂麿 p. 878
23. 下田歌子『泰西所見家庭教育』（博文館、1901）pp. 36-37
24. 下田歌子演説「英國の家庭教育 其三」『愛国婦人』第7号（1902年）  
『下田歌子著作集（2）』p. 13

ゴードン夫人宅（61 Princes Gate）周辺



写真① ゴードン夫人宅跡のマンション（右）



写真② ゴードン夫人宅並びの当時と同じ家並

エドワーズ夫人宅（19 Pelham Place）周辺



写真③ エドワーズ夫人宅（19 Pelham Place）



写真④ Pelham Place周辺

（写真はいずれも大関撮影）

本稿についての英国現地調査について、The National Archives 並びに Mrs. Loesje Roele-van Hellenburg Hubar の協力を感謝する。